

同志社大学  
2020 年度卒業論文

自殺念慮と相対的不満についての研究

社会学部社会学科  
学籍番号：1109171024  
氏名：城山 陸  
指導教員：立木茂雄教授  
(本文の文字数：20344)

## 要約

論題：自殺念慮と相対的不満についての研究

学籍番号：1109171024

氏名：城山 陸

自殺者数の多さが、日本における重大な社会問題になって久しい。著者が身近な友人を自殺によって亡くした経験をきっかけに、自殺の要因について研究したいと考えた。そして SNS やマスメディアが発達した現代において、自分と比べる他者という存在が大きいのではないかと考え、自殺念慮の要因として相対的不満が存在すると仮設し、明らかにすることを目的とした。

調査には先行研究を基にそれぞれの変数を作成し、インターネット上で質問票を配布・回収し、SPSS を用いて分析を行った。それぞれの変数が自殺念慮に与える影響を回帰分析によって導き、結果として仮説である自殺念慮と相対的不満の関係が明らかになった。また時代背景を組み入れた SNS・マスメディアと相対的不満との関係にはさらなる検討の余地を残す結果になったが、公的なデータとの比較を行って自殺念慮における性差を検証した。

キーワード：相対的不満、自殺念慮、性別による自殺念慮への影響

# 目次

1	はじめに .....	3
1.1	研究背景 .....	3
	(1) 自殺が問題となっている現状 .....	3
	(2) 男女別、年代別、特に若者の自殺の特徴 .....	4
1.2	先行研究 .....	6
	(1) 社会学における自殺 .....	6
	(2) 日本における自殺研究 .....	7
1.3	研究の目的 .....	8
2	方法 .....	8
2.1	.....	8
	調査概要 .....	8
2.2	質問紙内容 .....	9
	(1) 分析に使用した独立変数 .....	9
	(2) 分析に使用した従属変数 .....	11
2.3	リサーチデザイン .....	12
3	結果 .....	13
3.1	回答者の属性 .....	13
3.2	度数分布 .....	14
	(1) データの分布 .....	14
	(2) データの男女別比較 .....	16
3.3	相関分析 .....	17
	(1) 作成した変数ごとの相関分析 .....	17
	(2) マスメディア・SNS から感じる劣等感と自殺念慮の分析 .....	18
3.4	重回帰分析 .....	19
	(1) 男女差についての重回帰分析 .....	19
	(2) 恋人・配偶者の有無との関係 .....	22
	(3) 自殺容認度合いに影響する要因 .....	23
3.5	自殺念慮についての相談の有無 .....	24
4	考察 .....	25
4.1	度数分布 .....	25
4.2	相関分析 .....	25
4.3	重回帰分析 .....	26
	(1) 自殺念慮に影響を与える変数 .....	26

(2) 恋人・配偶者の有無による影響.....	26
4.4 自殺念慮に関する相談の有無 .....	27
5 結論.....	27
[参考文献] .....	29
[参考 URL] .....	29

# 1 はじめに

## 1.1 研究背景

### (1) 自殺が問題となっている現状

一般的に自殺と聞いて何を思い浮かべるだろうか。若者なら家庭問題やいじめ、年齢層が上がれば失業や貧困、もっと高齢になれば配偶者を失うことや老老介護の苦しみといった大きな社会問題を連想するが、個々の自殺として考えると、何らかの個人的な生活の上での苦しみから生まれる希死念慮が、個人に自殺を人生の選択肢として与えることになる。筆者は2019年に22歳の友人を自殺によって亡くした経験がある。当時は彼の家族や職場関係などについて詳しくは知っていなかったことや、実際に会った時、SNS上の彼は生き生きしているように見えたこともあり、「なぜ彼が自殺を選んだのか？」という疑問が常に頭に残ると同時に、強い無力感を感じたことを鮮明に覚えている。

新型インフルエンザの渦中にある2020年現在の状況については、グラフにある通り、前年度と比較し7月ごろから自殺者数が上回っていることが分かる。2019年の年間自殺者総数は20169人であり、2018年比で671人(約3.2%)減を記録していた。自殺者数は2009年以降10年連続で減少しており、統計上では過去最少であった。しかし2020年10月における自殺者数は、昨年度の10月に比べて39.8%増加しており、新型インフルエンザによる社会への影響が非常に大きいことが予測できる。マスメディアでは、成功を収めた著名な俳優や音楽アーティストなどの自殺も報道され、今まで以上に「自殺」という社会問題に直面する人々が多かつたのではないかと考える。

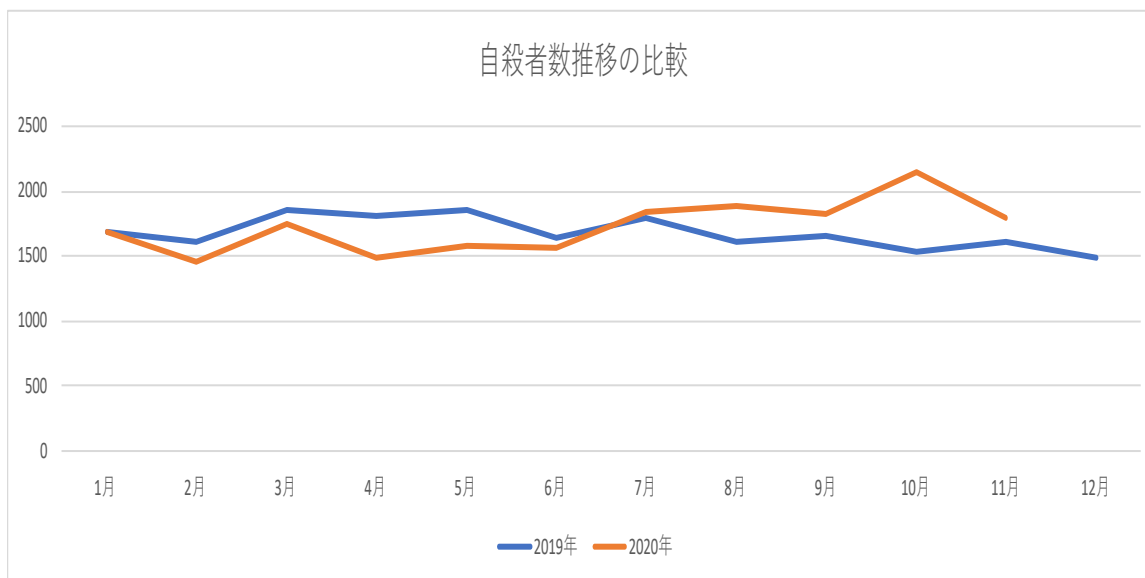


図1 自殺者数推移の比較

本稿では、国際的にも大きく深刻な、日本人の自殺について、自殺念慮を抱える人と、自殺を嫌悪する傾向にある人について、「相対的不満」をキーワードとして調査を進める。こ

の調査により、多くの人が自殺で身近な人を失ったときから長きにわたって残っているわだかまりを解消するきっかけになれば良いと考えている。

自殺という社会問題を取り上げるにあたり、まずは日本国内における自殺についての基本的な統計データについて解釈していく。厚生労働省のデータによれば、平成 22 年から減少傾向にある日本の自殺者数であるが、平成 30 年の統計でもその数は 2 万人を上回っている。さらに日本財団が 2016 年に行った、20 歳以上の男女を対象とした自殺意識調査では 4 人に一人が「本気で自殺したいと考えたことがある」と答え、過去一年以内に自殺を図ったことのある人は、全国で推定 53 万人を超えていることが分かっている。さらにこの調査によると、約 5 人に 1 人が家族や友人、恋人など身近な人を自殺で亡くしていること、そのうちの 33.9%が自殺念慮を抱き、10.8%が自殺未遂を経験していることが明らかになっている。日本財団は、2017 年と 2018 年にも第一回調査となった 2016 年の有効回答者に対して追跡調査を行っており、第三回調査となる 2018 年には補充調査として、調査対象者を 18 歳から 22 歳の男女に限定し、全国的な調査を行っている。第二回の調査では、前回自殺憂慮を抱えていた人の 3 人に 2 人が、1 年経過した時点でも同じく自殺憂慮を抱え、自殺未遂を 1 年以内に経験した人の半数が、その後の 1 年の間に再び自殺を図ろうとしていたことが分かった。特に若者に対象を絞って行われた第三回の補充調査については、次で述べる。

次に先進国の自殺について、国際比較してみる。日本のほかに、フランス、ドイツ、カナダ、アメリカ、イギリス、イタリアが加わっている G7 において、15 歳から 34 歳までの若年層の死亡数における自殺の占める割合を見てみると、G7 の中では自殺が死因の第一位となっているのは日本だけであり、他の先進国では事故が最も多い死因、その次に多いのが自殺（イタリアのみ病死）という形になっている。また先進国以外での統計でも、ロシアや韓国、フィンランドに加えて日本の自殺率の高さは非常に高い。そして先に挙げた日本財団による「約 4 人に 1 人が本気で自殺したいと考えたことがある」という統計が、日本が世界的に自殺の多い国であるというデータに、より自殺問題の身近さを付加していると感じられる。

## (2) 男女別、年代別、特に若者の自殺の特徴

日本財団の調査によれば、自殺念慮を抱えている人の割合は、身近な人を自殺で亡くした経験のない人も含めた全体に換算すると 25.4%、自殺未遂を経験したことのある人は 7.0%と、自殺によって身近な人を失ってしまった人ほど、生きることが辛くなってしまったとき、自殺という選択をしてしまうということが調査によって分かっている。また 20 歳から 39 歳の若年層と呼ばれる世代が、全世代の平均と比べ、自殺念慮と自殺未遂経験どちらの割合も高くなっており（20～39 歳の自殺念慮 34.5%、全世代：25.4%、20～39 歳の 1 年以内の自殺未遂：1.28%、全世代：0.6%）、若年層が経験する、進路や家族関係、職場・学校などの人間関係といった自殺のリスクを高める要因になり得るライフイベントに、多く直面することが理由として考えられている。また自殺が死因の最も大きな割合を占める、18 歳から 22 歳を対象とした第三回の補充調査では、「いざという時に何もしてくれない」「正直者がバカを見る」「希望が持てない」など日本社会に対するイメージが悲観的である

こと、「自殺は個人の問題」ではないと考えている一方で、「自殺はしてはいけない」とは考えていないという意識があることが分かり、自殺念慮・自殺未遂の最大要因として4人に1人が「いじめ」と回答しているが、6割近くが心理カウンセラーへの相談に抵抗感を持っていることが若年層の特徴として挙げられた。特に10代の自殺率は、全体の自殺数や他の年代の自殺率がさがっているなかでも唯一増加している。

また、自殺念慮や自殺者数には性差があることが分かっている。警視庁が発表しているデータによると、昭和53年から、女性の自殺者数が男性の自殺者数を上回ったことはなく、男性の自殺者数は2019年まで10年連続で減少しているが、自殺者数は女性の約2.3倍となっている。しかし、日本財団(2016)の第一回自殺意識調査では、女性の28.4%、男性の22.6%が「本気で自殺したいと考えたことがある」と回答している。なぜ自殺者数は男性の方が女性に比べ、約2.3倍も多くなっているのに、自殺念慮を抱いている割合は女性の方が大きくなっているのだろうか。日本財団(2016)では、男性と女性で自殺念慮を抱いた原因が異なっていることが明らかになっている。男性における自殺念慮を抱く主な原因は「勤務問題(転勤、仕事の不振、職場の人間関係、長時間労働等)」(44.0%)、「経済生活問題(倒産、事業不振、負債、失業等)」(40.0%)、「健康問題(自分の病気の悩み、身体の悩み等)」(39.6%)、「家庭問題(家族関係の不和、子育て、家族の介護・看病等)」(37.5%)となっている。一方女性は「家庭問題(家族関係の不和、子育て、家族の介護・看病等)」(55.4%)、「健康問題(自分の病気の悩み、身体の悩み等)」(37.6%)、「学校問題(いじめ、学業不振、教師との人間関係等)」(29.7%)、「男女問題(失恋、結婚をめぐる悩み等)」(28.2%)と、「家庭問題」を原因とした自殺念慮が非常に大きくなっていた。自殺未遂の経験というデータにおいても、女性は8.0%、男性は5.6%と女性の値の方が高くなっていることもあり、本調査では自殺という問題における男女差についても、明らかにしていきたいと考える。

先にも述べたが、筆者自身も自殺によって友人を亡くした経験があり、このことが「自殺」という社会問題について考える大きなきっかけとなった。筆者自身は大きな自殺憂慮を抱えたことはなく、彼とはそれほど親密だと言える間柄ではなかったが、筆者を含めた彼の友人のなかにも、彼の取った自殺という選択をきっかけとして、今後自殺念慮を抱く人がいる可能性があると考え、自殺が他人事であるとは全く思えないのである。実際に彼の亡くなった数か月前にも彼の友人に当たる女性が自殺によって亡くなっており、当時彼はとても悲しんでいたと人づてに聞いたが、彼女の自殺が彼の自殺念慮に多少の影響を与えたことは否定できない。影山(2003)によると「自殺の報道を聞いたら自分も自殺したくなるかもしれない」という回答が小中学生は10%から38%にみられたという。子供や若者が自殺したというニュースが出るたび、「生きていれば将来何が起こるかわからないのに」「なんとかその状況から逃げ出すという選択肢は取れなかったのか?」といった言葉を、一般の人々から著名人に至るまでの多くの人々が発するが、自殺を選んだ当事者も、そういったことを考えないはずはないだろう。ここではそういった自殺念慮を抱く人々の心理と、それに至る要因、さらに自殺を嫌悪・非難する人々についても社会的に解釈し、明らかにしていく。

## 1.2 先行研究

### (1) 社会学における自殺

デュルケム(1897)は「自殺論」の中で、自殺率が急増する19世紀のヨーロッパにおいて、プロテスタント教徒とカトリック教徒で自殺率が異なっていることや、好景気・不景気に問わず自殺者が一定であることに目を向け、自殺を社会的に類型化した。まず一つは教会の解釈する教えを重視するカトリック教徒に対し、聖書を重視して、それぞれの信仰心に基づいて教えを解釈するプロテスタント教徒を例に挙げられるような、宗教や政治、家族など社会的な統合が著しく弱いときに起こりやすくなる自己本位的自殺であり、常軌を逸した個人化によって自殺さえも個人の権利であるとさえ考えられてしまうようなものである。次に自殺を権利と捉える自己本位的自殺に対し、戦時中における兵士の自己犠牲や、未亡人の後追い自殺など、義務的な自殺を表す集団本位自殺である。社会的な統合が著しく高く、自我が所属している集団の規範によって大きく影響されることから起こるとされている。

最後にアノミー的自殺であるが、デュルケムはアノミーという言葉に「社会規範の動揺や崩壊によって生じる混沌状態、ないしはその結果である社会成員の欲求や行為の無規制状態。」と定義し、この無規制状態において社会生活の規範がなくなり、精神が不安定になることや、膨大に増幅した人々の欲望や理想と現実のギャップに絶望を感じることで自殺をする人が増えることを表している。本稿では、後に述べるリースマンの他人型志向において、同年代人の実生活を目の当たりにして出来上がる理想と、主観的にそれに劣っていると感ずる相対的剥奪を、デュルケムによるアノミー的自殺と併行的に考察していく。

リースマン(1961)は、集団的な環境の中に生きており、自分の身近なものや自分の見知らぬ者の間に、はっきりとした境界線が引かれていない現代人一般のことを「他人型志向」という社会的性格に当てはめた。リースマンは、彼らは不安という心理的な制御装置を持ち、それによって彼らの直接的な知り合いから、マスメディア・SNSを通じて間接的に知っている人まで、どこの誰に対しても素早く反応して、あらゆる場所において健在であると考えた。また他人型志向に当てはめられる現代人は、不安から他人が持っているのと同じような質の経験を持ちたいと常に願い、それが達成されなければまた不安に駆られ続けるとされている。リースマンの述べる「他人」とは、個人の方向付けを決定する同時代人、つまり同年代に生きている人々であり、「学生時代に親しい友達があったこと」「安定した仕事に就いていること」「恋人がいること」などが同年代集団における自己の適切さを表すものであるがゆえに、現代人は「学生時代に友達を作ることができなかった」「働くことができない」「恋人がいない」ということに深く悩む可能性がある。この他人型志向において、同世代に生きていく人のなかで自己が適切であると確信できないことによる不安、これはつまり彼らが持っている期待の水準と現実との主観的・相対的なギャップによるものであるという「相対的不満」と当てはめ議論を進めていく。

次に「相対的不満」について、マートン(1949)はその概念をアメリカ合衆国軍が第二次世界大戦中に行った社会心理学研究である「アメリカ兵」の事例を用いて次のように紹介した。相対的不満に関して正式な規定といったものは欠けているが、「アメリカ兵」の中で、自身が既婚であるかどうかや、教育程度、勤務年数を独立変数、軍隊への召集や軍隊内の地



位の昇進に対する不満を従属変数とし、人が年齢や教育、未婚や既婚かといった異なる部類に所属していることに応じて、その態度も変化するという概念として解釈している。この比較基盤は、実際に結合関係がある知人でもあり、同じ社会的地位や社会的部類に属するものでもあり、また反対に異なった社会的地位や社会的部類に属しているものとも比較が行われ、これらの他者に対して相対的に自分がどの程度の満足、または不平・不満を感じるか、つまり自己評価に当たる比較の基準なのである。この評価の基準について、現代でも概念として同じことがいえるのかという問題に関して、マスメディアが浸透した現代では、人々は自分とは異なった社会的地位や社会的部類に属した他者を見る機会が増え、彼らに多くの注意を払い、より大きな不平・不満を感じるのではないかと考えられる。

## (2) 日本における自殺研究

ここからは比較的新しい自殺に関する先行研究について考察してみる。若手社員の過労自殺の要因を探索するため、リクルートワークス研究所が2017年に行った研究によると、20代以下の若年層では、過重な労働によって、脳・心臓疾患を引き起こしての死亡である過労死に比べ、過重な労働による精神疾患からの自殺である過労自殺は、6倍近くになっており、多くの過労自殺ケースで過酷な労働環境や業務上のストレス、職場でのハラスメントといった要素が複合していると論じている。ここでは大野(2003)による高度成長期の日本人労働者の多くが「メランコリー親和型仕事倫理(メランコ仕事倫理)」を持っていたという論理を引用し、リストラや成果主義による職場の変容に、日本の伝統的な古き良き「期待される労働者像」を持っていた人が業務過多になり、過労自殺へと追い込まれたのだと説いている。大野によるとメランコリー親和型仕事倫理には気配り・頼まれたら断らない・他人本位などの「对人的配慮」、責任感・組織への忠誠心などの「役割同一性」、まじめさ・几帳面・完璧主義のような「秩序への固着」という三つの特徴があり、これを支える「良好な職場集団性」といった評価制度や管理システムが崩れることによって、労働者が大きなダメージを受けると論じている。

平野(2019)は日本における自殺率の分布において、有職者と無職者、単身世帯と同居世帯を比較し、それぞれ無職者の自殺死亡率は有職者の約2倍高いこと、単身世帯の自殺率死亡率は同居世帯のおよそ2.5倍高くなっていることを示し、都道府県別でも同様の傾向が見られるかを調査した。その結果すべての都道府県で、無職者・単身者の自殺の危険性が高いということが明らかになったが、その危険性の度合いは地域によってばらつきがあり、何らかの地域レベルの要因が影響している可能性があることが分かった。ここではそのような地域レベルの要因は、経済的差異や高齢化率の違いが示唆されているが、詳しく調査されておらず、今後の課題となっている。

自殺によって家族を亡くした自死遺族に関して、水津・佐藤(2015)は、多くの自死遺族が共有しているものの外部から理解されないこととして「自責の念」を挙げている。そこには2つの類型があり、一つは「自分のせいで自殺が起こってしまった(見過ごしてしまった・気づけなかった)」というものと、もう一つは「自分だけが生き残ってしまった」という、どちらも自死遺族自身の自己非難としての対自的被害であると考えられている。この自責の念が、先に挙げた日本財団による調査での「自殺によって身近な人を失ってしまった人ほ

ど、生きることが辛くなってしまったとき、自殺という選択をしてしまう」という結果に繋がってくる可能性も考えられるのではないだろうか。

### 1.3 研究の目的

マスメディアや SNS によって多くの見知らぬ人の情報を得ることができる現代の日本で、他人型志向の人々が持つアノミー的に広がる欲望、その理想と現実のギャップによる絶望や不安、自分がもっている家族や学校についての理想から生まれる劣等コンプレックスは、若者の自殺にどの程度影響しているのか、また同じような不安を抱えていても、自殺を嫌悪する人々と自殺憂慮を抱える人々の違いを分析していく。またここでは「相対的不満」という概念において、マスメディアの発達した現代でも、例えばテレビや SNS で見かけた羨望の対象となるような人、もしくは自分よりも若いのに大きな成功を残した著名人というような、実生活で接点のない他者という存在がマートンの考えた概念と同じように、人々の態度に影響を与えるのかを検証する。マートンによっては、相対的不満とは、同じまたは異なった社会的部類・社会的地位に所属している他者に対して、相対的に自分がどの程度の満足、または不平・不満を感じるかというものであったが、貧困や失業などの事実的な経済的不利、または家庭的な問題が自殺につながるというデータは明らかになっているので、あくまでも検証した相対的不満という概念が、自殺率という結果ではなく、自殺念慮という個人の意識にどのように・どの程度影響しているかということ进行分析する。

## 2 方法

### 2.1 調査概要

本研究は、Google フォームを使用し、質問紙調査を行った。2020 年 9 月～11 月にかけて著者自身の SNS アカウントを使用し回答を呼びかけ、インターネット上でデータを送信してもらうという方法をとった。対象者は 16 歳～52 歳の男性 65 名 (43%)、女性 85 名 (56.3%)、回答しない 1 名 (0.7%)、欠損値 2 名 (0.14%) の 153 名から回答を得ることができた。得られたこれらのデータについて、分析には統計解析ソフト IBM SPSS Statistics version26 を使用する。集計、分析には厚生労働省、日本財団による統計データを用い、公的なデータとも比較する。ここではマートン(1957)の「相対的不満」を用いて、「自殺は個人の権利」「自殺念慮がある」「自殺はしてはいけない」「自殺に対して嫌悪感がある」といった自殺に関する意識を従属変数として設定し、個人の性別、学歴、家族・友人関係、恋人・配偶者の有無、SNS の利用から他者についてどう感じるかといった各個人の属性や経験、思考の独立変数がどのように影響していくかを分析する。また本調査における質問紙では非常にセンシティブなテーマを扱い、多くの人々に回答を求めたので、この調査が自殺を促すものではないことを明記し、慎重に回収を行った。

## 2.2 質問紙内容

### (1) 分析に使用した独立変数

まずは、調査で使用した自殺念慮の強さと相対的不満の大きさという二つの概念、そしてそれらに対応する下位概念と質問項目について説明を行う。質問紙では主に、回答者の基本属性に加え、相対的不満と自殺念慮という2つの概念について尋ねた。

表1 日本財団第一回自殺意識調査（2016）

テーマ	質問項目	質問文
		私は、家族の役に立っている
		私は、家族を信頼している
	自己有用感（家族）	
心に関する尺度、社会とのつながり、自己有用感、問題解決能力について		私は、家族と一緒にいると安心する
		私は、家族に支えられている
		私は、家族の重要な一員だ
		私は、家族から信頼されている
		私は、友人を信頼している
		私は、友人から信頼されている
		私は、友人の役に立っている
		私は、友人と一緒にいると安心する
	自己有用感（友人）	
		私は、友人に支えられている
		私は、友人グループの中の重要な一員だ

上位概念である相対的不満を想定する下位概念として、相対的な家族関係の良し悪し、相対的な友人関係の良し悪し、機会への不平等感、同世代における自己の適正感と疎外感、自分が器用だと思うかという5つの項目を設定した。相対的不満という概念では調査項目に関しては、日本財団が2019年に行った第3回自殺意識調査における質問項目を追加・修正し、より相対的な不満の感情について調査していく。

表2 機会への不平等感についての質問項目

概念	下位概念	質問項目
相対的不満	機会への不平等感	自分の生い立ちは、人よりも恵まれていない 自分ではどうしようもできない問題に直面することが、人よりも多かった 自分の性別が原因で、諦めざるを得なかった事柄がある 今まで家計などの金銭面が原因で、人よりもできないことが多かった 社会において、家族ごとに格差があることは当然だ

表3 同世代における自己の適正感/疎外感についての質問項目

概念	下位概念	質問項目
相対的不満	同世代における自己の適正感/疎外感	同世代のなかで、自分は友人が多い方だ 同世代のなかで、自分は成功している方だと 同世代において、自分は普遍的な地位にいる 同世代において、自分は浮いた存在だ マスメディアやSNSで同世代の成功者を見て、劣等感を感じる 同世代において、友人や恋人がいることは普通だ

表4 自分が器用だと思うかについての質問項目

概念	下位概念	質問項目
相対的不満	自分が器用な方だと思うかどうか	自分は器用に生きている方だ 問題に直面しても、たいていのことはなんとかなる

相対的な家族関係の良し悪しと、相対的な友人関係の良し悪しという二つの下位概念においては、表1にある日本財団第一回自殺意識調査(2016)を参考にし、選定した。どちらも「心に関する尺度・社会とのつながり・自己有用感・問題解決能力について」の項目から、家族・友人関係における社会とのつながりや自己有用感に関連するものを使用した。また家族・友人関係以外の3つの下位概念については著者自身が項目を設定し、それぞれ2~6つの質問項目から尺度を作成した。

(2) 分析に使用した従属変数

従属変数については、自殺念慮の強さを測るため、将来への不安（社会、就業、家庭）、自殺容認度、過去の自殺憂慮経験、負担感の知覚、自殺企図歴、自殺能力という6つの要因を設定した。負担感とは、友人関係や家族関係など、社会や親しい人にとって、自分の存在が負担になっていると感じることである。また自殺能力とは、血や痛み、死への恐怖を感じない個人の特性であり、自殺しようと思えば自殺できるという能力を測るものである。

それぞれの質問項目に合わせ、「とてもそう思う/とてもよくあてはまる」1点、「そう思う/あてはまる」2点、「どちらともいえない」3点、「どちらかといえばそう思わない/どちらかといえばあてはまらない」4点、「全くそう思わない/全くあてはまらない」5点で得点化し、分析に使用した。過去の自殺憂慮経験・自殺企図歴についての質問では、「あてはまる」1点、「あてはまらない」の5点で得点化し、希死念慮を抱いた経験や自殺未遂の経験について2つの選択肢を分析した。また、「負担感の知覚」と「自殺能力」については、相羽・太刀川・Lebowitz（2019）による自殺潜在能力尺度を参考にし、作成した。

質問紙は基本属性、相対的不満に関する項目、自殺念慮に関する項目、自殺念慮や企図歴についての自由記述項目の計73項目によって構成されており、自由記述項目についても説明を行う。自由記述項目では主に、回答者が「本気で自殺したいと考えた」「自殺未遂をした」ことがある場合、どのような事柄がその要因になっていたのか、またその時に誰かに相談したのか、思いとどまった理由についても項目を設定した。これは個人の自殺念慮がどういった要因によって最も大きく影響されたのか、どのような要因が自殺という行動を抑止したのか、また相談するという行動について日本財団による調査との比較を行うためである。この結果についても、補足的に分析を行っていく。

表5 将来への不安感についての質問項目

変数	要因	質問項目
自殺念慮	将来への不安感	日本社会は、いざというときに援助してくれる社会だ
		日本社会は、いざという時に何もしてくれない社会だ
		日本社会は、正直者が報われる社会だ
		日本社会は、正直者がバカを見る社会だ
		日本社会は、希望が持てる社会だ
		日本社会は、希望が持てない社会だ
		自分の将来は、ある程度思い描いているようになる 将来自分が重い病気や怪我をしたときのことを考え、不安になる

表6 自殺容認度についての質問項目

変数	要因	質問項目
自殺念慮	自殺容認度	自殺は個人の問題である
		生死は最終的に本人の判断に任せるべきだ
		自殺せずに生きていれば良いことがある
		自殺する人は、直前まで実行するかやめるか気持ちが揺れ動いてい
		自殺は繰り返されるので、周囲の人が止めることはできない
		自殺する人は余程つらいことがあったのだろうと思う

表7 過去の自殺憂慮経験についての質問項目

変数	要因	質問項目
自殺念慮	過去の自殺憂慮経験	これまでの人生のなかで、本気で自殺したいと考えたことがある 「本気で自殺したいと考えた」のは、どのような事柄が原因だと思いますか 「本気で自殺したいと考えた」とき、誰かに相談しましたか 実際に自殺を企図しなかった原因は何だと思いますか 実際に自殺の計画を立てたことがある

表8 自殺企図歴についての質問項目

変数	要因	質問項目
自殺念慮	自殺企図歴	これまで自殺未遂をしたことがある 自殺を目的としない、自傷行為等の経験がある 上記の2点について、誰かに相談した 「自殺未遂をした」のは、どのような事柄が原因だと思いますか 本気で死のうと思ったものの、思いとどまった理由は何ですか これまで自殺したいと思った時、自殺未遂をしたときに誰かに相談しましたか 誰にも相談しなかった理由は何ですか

表9 負担感の知覚についての質問項目

変数	要因	質問項目
自殺念慮	負担感の知覚	私がいなければ、私のまわりの人たちはもっとうまくいく 私は社会に貢献できている 私がいなく私がまわりの人たちは幸せになる 私はまわりの人たちを失望させている 私のまわりの人たちは、もし私がいなくなったら寂しがらるだろう 私はまわりの人たちのお荷物になっている 私は社会のお荷物だ 私はまわりの人たちの役に立っている 自分のアイデアや能力、エネルギーが社会を変えらると思う 私が死ねば、私のまわりの人たちはほっとするのではないかと思う 私はまわりの人たちの幸せに貢献できている 私は地域に貢献できている 自分がまわりの人たちの邪魔になっている 自分がまわりの人たちにとって重要だ

### 2.3 リサーチデザイン

調査票を作成するために用いたリサーチデザインについて、説明を行う。個人が感じている相対的不満が、その自殺念慮に影響を与えるという仮説を軸とし、リサーチデザインの作成を行った。この調査において従属変数である「自殺念慮」を測る要因は、「過去の自殺憂慮経験」「将来への不安」「自殺容認度」「自殺企図歴」「負担感の知覚」「自殺能力」の6項目である。そして独立変数である「相対的不満」は、「相対的な家族関係の良し悪し」「相対的な友人関係の良し悪し」「機会への不平等感」「自分が器用だと思うか」「同世代における

自己の適正感/疎外感」の6項目で測ることとし、従属変数・独立変数とそれらの要因についてリサーチデザインとして示したものが図1である。特に相対的不満において、分析に用いる際には逆転項目として質問の点数を反転させ「相対的な家族関係の悪さ」「相対的な友人関係の悪さ」「自己の不器用感」「同世代における自己の疎外感」のように設定し、相対的不満の強さを測ることとする。

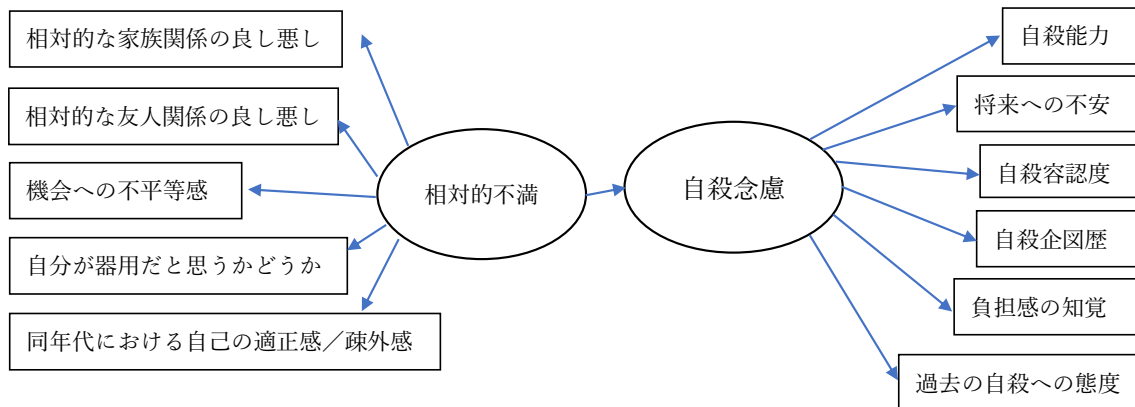


図1 リサーチデザイン

### 3 結果

#### 3.1 回答者の属性

まず、計153名（欠損値2名）の回答者全体について、図2においてその属性を示す。回答者は16歳から52歳にわたる男女と1人の性別未回答者であった。男女どちらにおいても20歳から22歳の回答者が大半を占め、19歳以下と23歳以上の占める割合は、24.5%と4分の1に満たなかった。また、回答者における職業の分布では短期大学・専門学校を含む大学生と回答した人が151人中の112人を占め、学生の比率が高い結果となった。恋人の有無に関しては「いる」と答えた人が64人（42.7%）、「いない」と答えた人は85人（56.6%）、「微妙なライン」が1人（0.7%）と、やや「いない」と回答した人の方が多い結果になったが、恋人の有無による相対的不満・自殺念慮への影響についても、のちほど分析を進めていきたいと考えている。

表 11 年齢分布

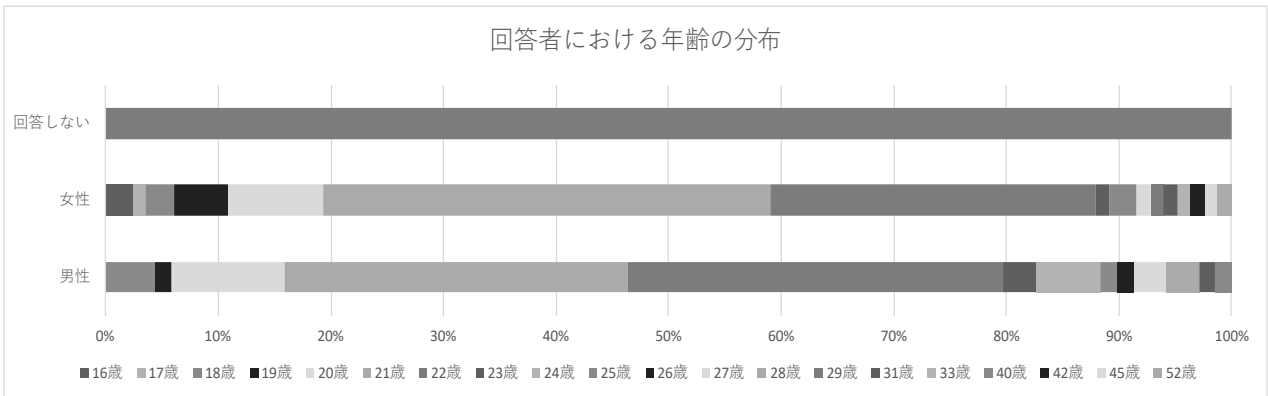


表 11 回答者における職業別の割合



### 3.2 度数分布

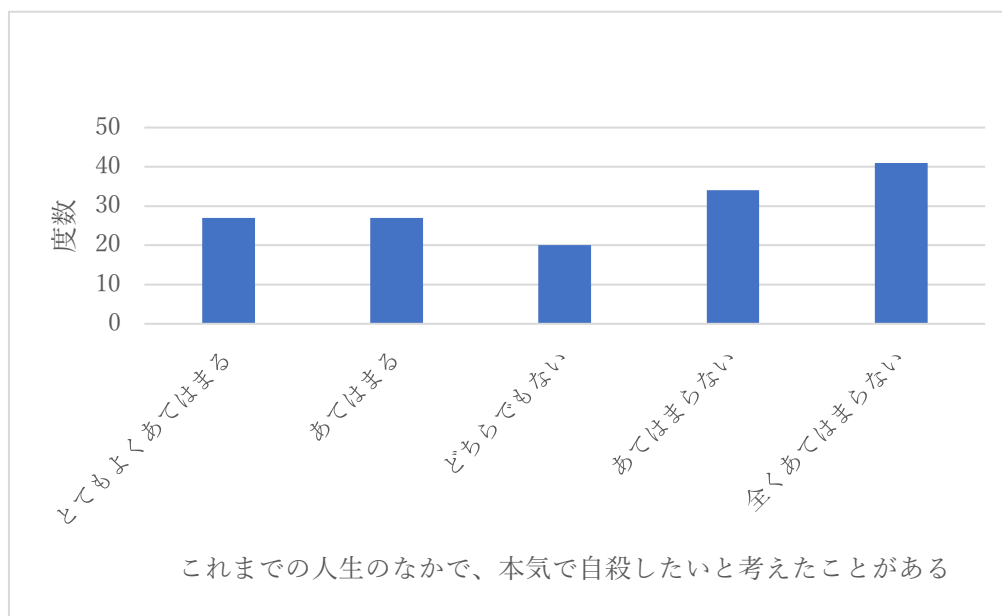
#### (1) データの分布

日本財団の第二回の調査において、自殺憂慮を抱えていた人の3人に2人が、1年経過した時点でも変わらず自殺憂慮を抱えていた。また自殺未遂を1年以内に経験した人の半数が、その後の1年の間に再び自殺を凶ろうとしていたことから、現在の自殺念慮に大きく影響を与えると考えられる「自殺企図歴」「自殺を目的としない自傷行為の経験」について、度数分布表を作成した。まずは「これまでの人生の中で、本気で自殺したいと考えたことがある」という質問についての度数分布について説明を行う。この質問には149人が回答し、「とてもよくあてはまる」と答えた人は27人、「あてはまる」と答えた人は同じく27人の、計54人（36%）であった。日本財団が2016年に行った調査は20代から65歳以上までの幅広い回答者を対象としており、20代が13.3%、30代が16.8%、40代



が19.3%、50代が17.2%、60歳から64歳が12.1%、65歳以上が21.3%と、10代・20代がほとんどを占める本調査とは年齢の分布が大きく違っている。本調査と同じく「これまでの人生の中で、本気で自殺したいと考えたことがある」という質問を行った日本財団（2016）の結果では、25.4%が「本気で自殺したいと考えたことがある」と回答しており、このことから若い世代になるほど自殺念慮を抱きやすいことがわかっている。

表 13 度数分布 過去の自殺念慮



次に「実際に自殺の計画を立てたことがある」という質問に対し「あてはまる」と答えた人は22人であり、「あてはまらない」と答えた124人であった。過去に実際自殺の計画を立てた人の割合は、全体の17.7%であり、そのうち「これまでの人生の中で、本気で自殺したいと考えたことがある」という質問で「とてもよくあてはまる」と答えた人が14人、「あてはまる」と答えた人が7人、「どちらでもない」と答えた人が1人と、自殺企図の経験がある人のほとんどが自殺念慮を抱えていることがわかる。本調査の結果では、実際に自殺未遂の経験がある人は150人中10人であった。しかしその全員が「これまでの人生の中で、本気で自殺したいと考えたことがある」という質問で「とてもよくあてはまる」「あてはまる」と答え、「実際に自殺の計画を立てたことがある」という質問に対し「あてはまる」と回答していた。

自殺未遂を経験した人は全体に対して10人と、6.6%の割合であったが、自殺念慮が自殺企図や自殺未遂経験に大きく影響していることがわかる。自殺念慮から実際に自殺企図へ、そして自殺未遂経験という3つの段階ごとに度数は小さくなっているが、根底的に自殺念慮を抱いている人だけが自殺という行為に至ってしまうということが本調査の結果から得られた

表 12 度数分布 自殺企図歴

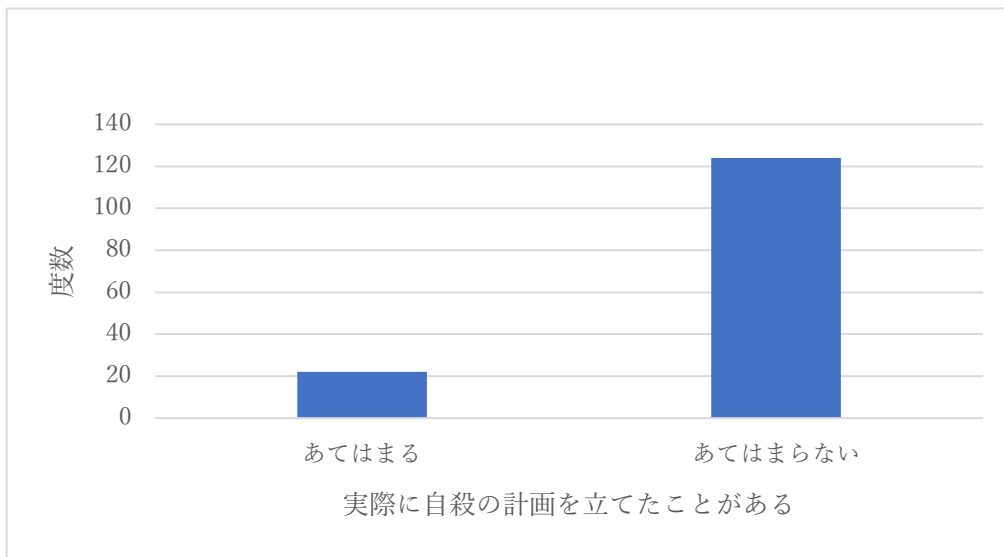
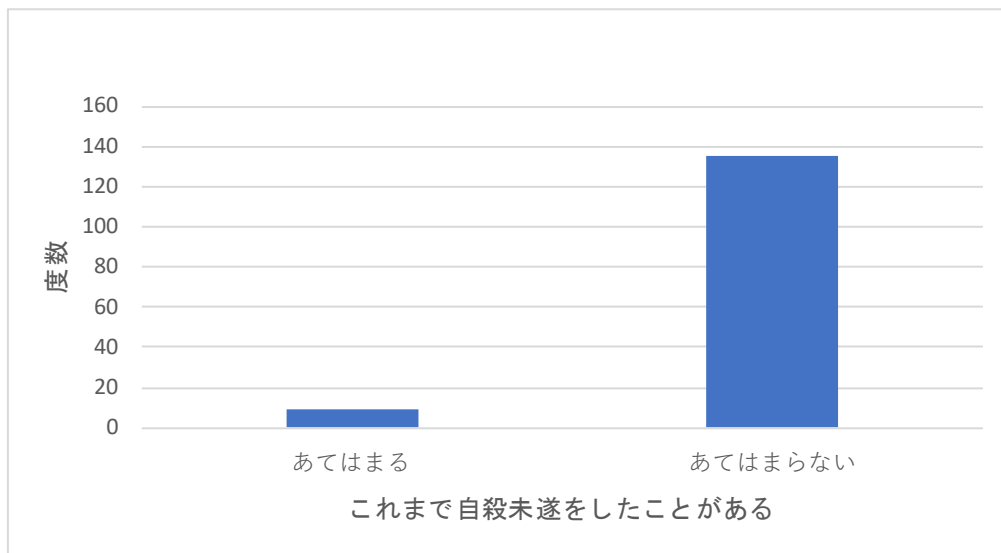


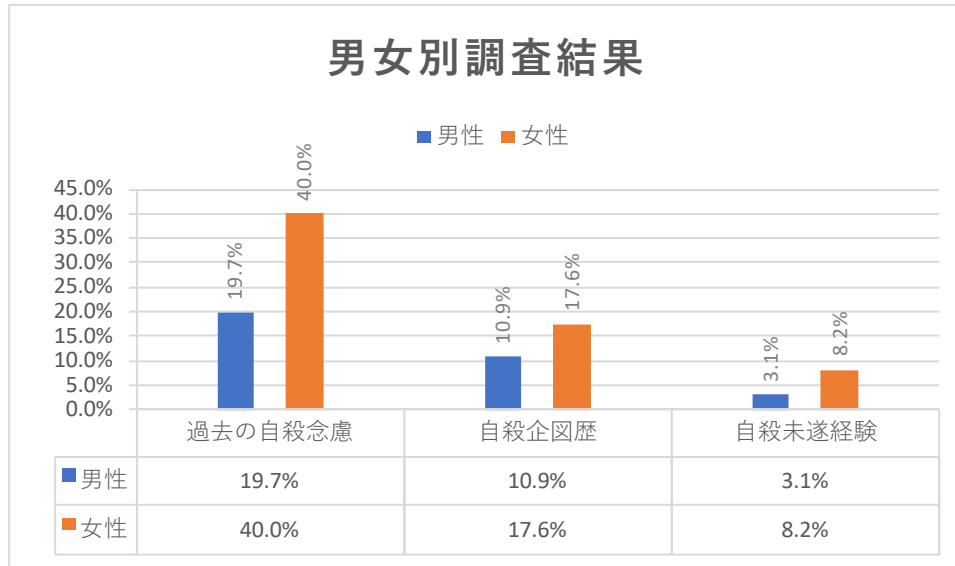
表 13 度数分布 自殺未遂経験



(2) データの男女別比較

ここで、以上のデータについて男女別に比較を行っていく。集計したデータについて、その割合を表 14 に示した。男女ともに「過去の自殺念慮」では、「これまでの人生の中で、本気で自殺したいと考えたことがある」の質問に「とてもよくあてはまる」「あてはまる」と答えた者、「自殺企図歴」では「実際に自殺の計画を立てたことがある」の質問に「あてはまる」と答えた者、「自殺未遂経験」では「これまで自殺未遂をしたことがある」の質問に「あてはまる」と答えた者を集計し、男女別に示した。表 14 からは、どの項目においても女性における割合が男性に比べ高くなっていることがわかる。

表 14 自殺念慮の男女別結果



### 3.3 相関分析

#### (1) 作成した変数ごとの相関分析

重回帰分析を進める前に、本調査における「相対的不満の強さが自殺念慮の強さに影響を与える」という仮説について、相関分析を行う。まずは「相対的な家族関係の悪さ」「相対的な友人関係の悪さ」「自己の不器用感」「同世代における自己の疎外感」「社会への不平等感」の得点を合算して設定した「相対的不満の強さ」と、「過去の自殺憂慮経験」「将来への不安」「自殺容認度」「自殺企図歴」「負担感の知覚」「自殺能力」の得点を合わせた「自殺念慮の強さ」という2つの変数について、相関関係を分析した。2つの変数間では、相関係数Rが0.620、1%水準で有意であることがわかる。

表 15 相関分析 自殺念慮と相対的不満

		自殺念慮の強さ	相対的不満の強さ
自殺念慮の強さ	Pearson の相関係数	1	.620**
	有意確率 (両側)		0.000
	度数	133	130
相対的不満の強さ	Pearson の相関係数	.620**	1
	有意確率 (両側)	0.000	
	度数	130	147

次に表 16 は、自殺念慮の強さの変数に加え、相対的不満の強さを測る 5 つの変数との相関分析を示したものである。こちらでも「社会への不平等感」以外の 4 つの変数では 1%水準で有意であり、「自殺念慮の強さ」と他のすべての変数間において、正の相関がみられる。「家族関係の悪さ」「友人関係の悪さ」の 2 つの変数における、「自殺念慮の強さ」との相関係数は 0.518、0.512 と、ほかの変数よりも強い正の相関があるということが認められる。以上により、「自殺念慮の強さ」は「社会への不平等感」以外の「相対的不満の強さ」を測る変数と 1%水準で有意、正の相関がみられた。

表 16 相関分析 自殺念慮と相対的不満の説明変数

		自殺念慮の強さ	家族関係の悪さ	友人関係の悪さ	同世代における自己の不適正感	自己の不器用さ	社会への不平等感
自殺念慮の強さ	Pearson の相関係数	1	.518**	.512**	.338**	.285**	0.142
	有意確率(両側)		0.000	0.000	0.000	0.001	0.103
	度数	133	132	133	133	131	133
家族関係の悪さ	Pearson の相関係数	.518**	1	.321**	.313**	.350**	.236**
	有意確率(両側)	0.000		0.000	0.000	0.000	0.004
	度数	132	149	149	149	147	149
友人関係の悪さ	Pearson の相関係数	.512**	.321**	1	.298**	.362**	0.087
	有意確率(両側)	0.000	0.000		0.000	0.000	0.287
	度数	133	149	150	150	148	150
同世代における自己の不満	Pearson の相関係数	.338**	.313**	.298**	1	.568**	.269**
	有意確率(両側)	0.000	0.000	0.000		0.000	0.001
	度数	133	149	150	150	148	150
自己の不器用さ	Pearson の相関係数	.285**	.350**	.362**	.568**	1	.279**
	有意確率(両側)	0.001	0.000	0.000	0.000		0.001
	度数	131	147	148	148	148	148
社会への不平等感	Pearson の相関係数	0.142	.236**	0.087	.269**	.279**	1
	有意確率(両側)	0.103	0.004	0.287	0.001	0.001	
	度数	133	149	150	150	148	150

(2) マスメディア・SNS から感じる劣等感と自殺念慮の分析

本調査で使用了「相対的不満」という概念について、マスメディアや SNS が発達した現代、自分と同世代でありながら成功を残した人と自分を比べ、その劣等感が相対的不満や自殺念慮に影響するのかを分析する。ここでは「マスメディアや SNS で同世代の成功者を見て、劣等感を感じる」という質問項目を使用し、自殺念慮・相対的不満との関係を相関分析によって導いた。これまでに使用してきた「相対的不満の強さ」の変数では該当する質問項目が含まれているので、ここでは「マスメディアや SNS で同世代の成功者を見て、劣等

感を感じる」の項目のみを除外し、「自殺念慮の強さ（SNS 除外）」の変数を作成した。得られた相関分析が表 17 である。この表によるとマスメディア・SNS 使用による劣等感が、自殺念慮の強さと相対的不満に影響を与えているという相関が有意ではないことが分かる。

表 17 相関分析 マスメディア・SNS 使用による劣等感

		マスメディアやSNSで同世代の成功者を見て、劣等感を感じる	相対的不満の強さ（SNS 除外）	自殺念慮の強さ
マスメディアやSNSで同世代の成功者を見て、劣等感を感じる	Pearson の相関係数	1	0.080	0.013
	有意確率（両側）		0.337	0.878
	度数	150	147	133
相対的不満の強さ（SNS 除外）	Pearson の相関係数	0.080	1	.593**
	有意確率（両側）	0.337		0.000
	度数	147	147	130
自殺念慮の強さ	Pearson の相関係数	0.013	.593**	1
	有意確率（両側）	0.878	0.000	
	度数	133	130	133

### 3.4 重回帰分析

#### (1) 男女差についての重回帰分析

著者が立てた「個人が感じている相対的不満が、その自殺念慮に影響を与える」という仮説について重回帰分析を行った。ここではその結果について説明していく。「自殺念慮の強さ」を従属変数とし、「相対的不満の強さ」を説明する「相対的な家族関係の悪さ」「相対的な友人関係の悪さ」「自己の不器用感」「同世代における自己の疎外感」「社会への不平等感」の 6 つの変数を独立変数として設定した。まずは男女の区別なく、すべての回答者によるデータの重回帰分析について説明する。「社会への不平等感」以外の独立変数については、それぞれの質問項目から得られた「とてもよくあてはまる/とてもそう思う」の 1 点から「まったくあてはまらない/全くそう思わない」の 5 点の得点を反転させた逆転項目を使用した。

表男女の区別無く分析を行った場合、決定係数である調整済み R<sup>2</sup> 乗値は 0.450 であった。また「家族関係の悪さ」「友人関係の悪さ」の独立変数は 1%水準で、「同世代における自己の不適切感」は 10%水準で有意であった。標準化係数については「家族関係の悪さ」が 0.371 であり、「友人関係の悪さ」が 0.380 と、やや「友人関係の悪さ」の方が「自殺念

慮の強さ」に大きく影響を与えていることが読み取れる。「同世代における自己の不適正感」では 0.143 と、上記の二つより影響の度合いは小さいという結果になった。一方「自己の不器用さ」「社会への不平等感」の、2 つの独立変数においては、有意であるとの結果が得られなかった。

表 18 重回帰分析 従属変数：自殺念慮の強さ

B	非標準化係数		標準化係数
		標準誤差	ベータ
家族関係の悪さ	1.808	0.353	0.371***
友人関係の悪さ	1.792	0.338	0.380***
同世代における自己の不適正感	0.890	0.492	0.143*
自己の不器用さ	-0.119	0.889	-0.011
社会への不平等感	0.291	0.424	0.047

調整済みR2乗=.450

\*\*\*p<1%, \*\*p<5%, \*p<10 %

次に男女別に行った重回帰分析についても、表 19 と表 20 から結果を説明していく。性別に関しては 1 名のみが「回答しない」と回答しており、分析に含むことができなかったため、あくまで男女別 2 パターンの分析結果となる。

表 19 重回帰分析 従属変数：自殺念慮の強さ 男性のみ抽出

モデル	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ
家族関係の悪さ	1.976	0.556	0.428***
友人関係の悪さ	0.973	0.666	0.188
同世代における自己の不適正感	1.621	0.916	0.240*
自己の不器用さ	0.897	1.707	0.075
社会への不平等感	-0.636	0.739	-0.102

調整済みR2乗=.318

\*\*\*p<1%, \*\*p<5%, \*p<10 %

男性のみについての分析では決定係数である R2 乗値は 0.318 であり、「家族関係の悪さ」で 1%水準、「同世代における自己の不適切感」で 10%水準の有意であるとの結果が得られた。しかし男女混合の分析において有意であった「友人関係の悪さ」という独立変数、そして「自己の不器用さ」「社会への不平等感」では、有意であるとは言うことができなかった。非標準化係数については、「家族関係の悪さ」が 0.428、「同世代における自己の不適切感」が 0.240 と、「家族関係の悪さ」においては、男女混合の分析結果より自殺念慮の強さに大きな影響が見られた。

次に、表 20 から女性のみ分析結果についての説明を行う。ここでの R2 乗値は 0.542 であった。「家族関係の悪さ」については男女混合、男性のみと同じく 1%水準で有意であり、「友人関係の悪さ」についても 1%水準で有意であったが、この二つの従属変数以外については 10%水準でも有意であるという結果が得られなかった。非標準化係数について、「家族関係の悪さ」が 0.358 であり、「友人関係の悪さ」は 0.468 と、「友人関係の悪さ」による「自殺念慮の強さ」への影響が他の結果よりも高くなっていることが分かった。

表 20 重回帰分析 従属変数：自殺念慮の強さ 女性のみ抽出

モデル	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ
家族関係の悪さ	1.539	0.518	0.305***
友人関係の悪さ	2.098	0.436	0.468***
同世代における自己の不適切感	0.488	0.569	0.084
自己の不器用さ	-0.500	1.063	-0.048
社会への不平等感	0.809	0.516	0.134

調整済みR2乗=.542

\*\*\*p<1%, \*\*p<5%, \*p<10 %

ここまで性別による分類なし、男性のみ、女性のみという 3 種類における重回帰分析を行ってきたが、すべての結果で有意かつ、「自殺念慮の強さ」に影響を与えていた「家族関係の悪さ」という変数に着目してみる。ここでは 2 つの変数について、単回帰分析を行った。その結果が表 18 である。この場合、調整済み R2 乗値は 0.268 であり、標準化係数は 0.517、そして 1%水準で有意という結果になった。

表 21 回帰分析 従属変数：自殺念慮の強さ

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数
	B		ベータ
(定数)	77.338	8.832	
家族関係の悪さ	2.503	0.363	0.517***

調整済みR2乗=.268

\*\*\*p<1%,\*\*p<5%,\*p<10%

この結果を散布図にし、回帰直線を引いたものが図2である。表21で見た回帰分析の通り、家族関係が悪くなるほど自殺念慮の強さが大きくなることが確認できる。

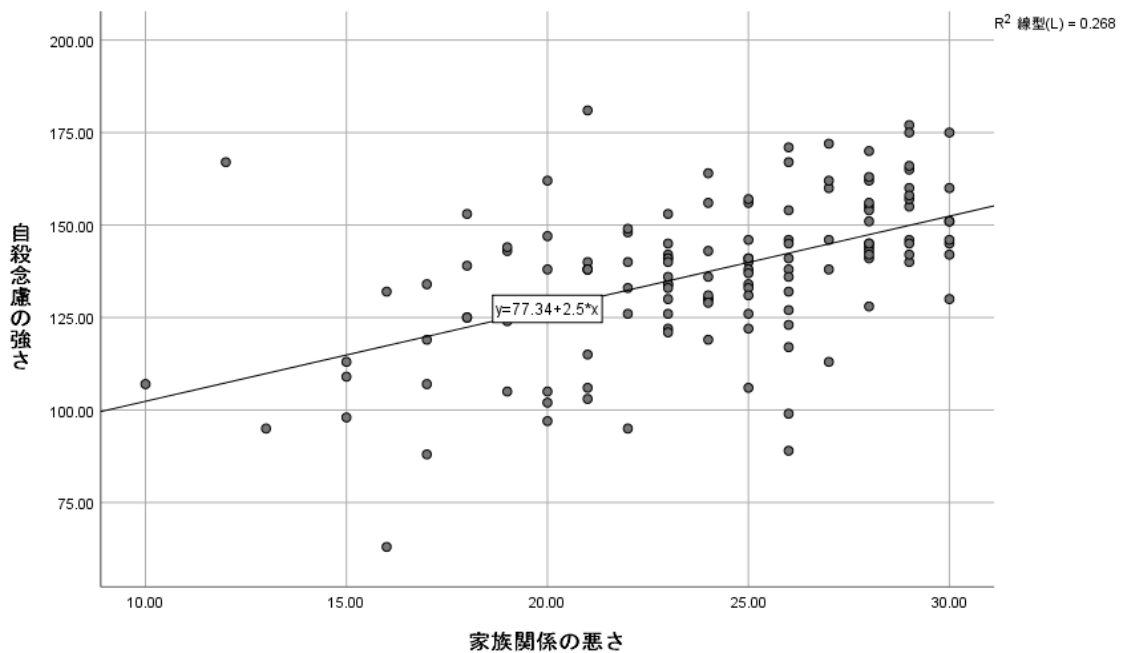


図2 散布図 自殺念慮と家族関係の悪さ

## (2) 恋人・配偶者の有無との関係

ここでは本調査において、回答者の恋人・配偶者の有無という属性が自殺念慮・相対的不満にどのような影響を与えているのかを説明する。そこで「あなたには恋人（配偶者）がいますか？」という質問に対して「いる」という回答を1点、それ以外を0点と設定し「恋人・配偶者ダミー」というダミー変数を作成し、回帰分析を行った。「自殺念慮の強さ」を従属変数として設定した場合について、調整済みR2乗値は0.038、恋人または配偶者がい



ることによる標準化係数は 0.159、10%水準で有意であるとの結果が得られた。次に「相対的不満の強さ」を従属変数として設定した場合、調整済み R2 乗値は 0.039、恋人または配偶者がいることによる標準化係数は 0.198、これは 1%水準で有意であるとの結果が得られた。どちらの結果を見ても、統計的に有意であるとの結果が出ているが、これまで行ってきた回帰分析に比べ、大幅に決定係数である R2 乗値が低く、0 に近づいていることが分かる。

表 22 回帰分析 従属変数：自殺念慮の強さ 恋人・配偶者ダミー

	B (定数)	非標準化係数		標準化係数
		標準誤差		ベータ
1	134.333	2.375		
	恋人・配偶者ダミー	6.667	3.596	0.159*

調整済みR2乗=.038

\*\*\*p<1%,\*\*p<5%,\*p<10%

表 23 回帰分析 従属変数：相対的不満の強さ 恋人・配偶者ダミー

	B (定数)	非標準化係数		標準化係数
		標準誤差		ベータ
1	85.554	1.241		
	恋人・配偶者ダミー	4.589	1.889	0.198**

調整済みR2乗=.039

\*\*\*p<1%,\*\*p<5%,\*p<10%

### (3) 自殺容認度合いに影響する要因

次に、どのような人が自殺を容認、または嫌悪するののかについての分析を行う。「自殺容認度合い」については「自殺は個人の問題である」「生死は最終的に本人の判断に任せるべきだ」「自殺は繰り返されるので、周囲の人が止めることはできない」の3つの質問項目の得点と、「自殺する人は余程つらいことがあったのだろうと思う」「自殺せずに生きていれば良いことがある」「自殺する人は、直前まで実行するかやめるか気持ちが揺れ動いている」の3つの質問項目での得点を反転し、逆転項目として使用し変数を作成した。そして「自殺容認度合い」を従属変数、相対的不満の要因として設定した5つの変数を独立変数とし、重回帰分析を行ったものが表 24 である。

表 24 重回帰分析 従属変数：自殺容認度合い

	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ
(定数)	24.980	2.623	
家族関係の 良さ	-0.191	0.071	-0.223***
友人関係の 良さ	-0.305	0.073	-0.337***
同世代にお ける自己の 不適正感	0.148	0.106	0.129
自己の不器 用さ	-0.243	0.192	-0.120
社会への不 平等感	0.003	0.087	0.003

調整済みR2乗=.190

\*\*\*p<1%,\*\*p<5%,\*p<10%

調整済み R2 乗値は 0.190、「家族関係の良さ」「友人関係の良さ」では 1%水準で有意といえる結果になったが、他 3 つの独立変数による影響は、有意であるとは言えなかった。標準化係数を見てみると「家族関係の良さ」は-0.233、「友人関係の良さ」は-0.337 と、友人関係の方が影響の度合いが高く、どちらも自殺容認度合いに負の影響を与えていることが分かった。

### 3.5 自殺念慮についての相談の有無

本調査では「これまでの人生で、本気で自殺したいと考えたことがある」「これまで自殺未遂をしたことがある」の項目に「とてもよくあてはまる」「あてはまる」と答えた人に、相談の有無や誰に相談したのか、またなぜ相談しなかったのかについて、自由記述質問を設けた。そこで補足的ではあるが、自殺念慮や自殺未遂を経験した際の相談の有無についての割合、そして理由についてまとめる。まずは自殺念慮を抱えた際、相談をしたかどうかについて、73 人の回答が得られた。そのなかで相談したと答えたのは 14 人であった。相談した対象が家族（両親・祖母・母親）であったのは 5 人、友人が 5 人、恩師・先輩・カウンセラーが一人ずつとなった。また、相談しなかった理由において最も多かったのは「相談しても解決しないから」という旨の回答（5 名）であり、次に「どうせ理解されないから」（4 名）、「迷惑（負担）になるから」「知られたくない/言いたくない」「相談しようと考えなかったから」「相談することができなかったから」「止められるから」が二人ずつと、回答者それぞれの理由によって周りに相談できない人が多くを占めた。

次に自殺未遂経験の前後における相談の有無とその理由である。自殺未遂を経験したのは 10 名であり、周りに相談をしたのはそのうち 3 名であった。相談をした対象は家族・友達のいずれかであり、相談しなかった理由としては自殺念慮の相談と同じく「相談しても解決しないから」「迷惑（負担）になるから」「止められるから」「どうせ理解されないから」となった。

## 4 考察

### 4.1 度数分布

表 11 から表 13 の度数分布表からは、「これまでの人生で、本気で自殺したいと考えたことがある」「実際に自殺の計画を立てたことがある」「これまで自殺未遂をしたことがある」という 3 つの質問において、質問に当てはまった回答者は段階的に減少していることが分かった。自殺念慮を抱いていたとしても、それを実行に移そうとするのは半数以下であり、自殺念慮を抱いてしまった時点での早期の解消が非常に重要であると考えられる。

男女別に比較した自殺念慮を示した表 14 では、過去の自殺念慮、自殺企図歴、自殺未遂経験のすべてで女性が男性を上回っていた。日本財団（2016）においても女性の 28.4%、男性の 22.6%が「本気で自殺したいと考えたことがある」と回答しており、若者を中心とした本調査の結果からも、男性より女性の方が自殺念慮を抱きやすく、自殺企図・自殺未遂を経験した割合が高いという同じ傾向が見られた。

そして自殺念慮を抱いたことがあるかについて質問した「これまでの人生で、本気で自殺したいと考えたことがある」には 36%が「とてもよくあてはまる」「あてはまる」と答えており、日本財団（2016）の調査結果である 25.4%よりも高い結果であった。日本財団（2016）の調査に比べ、本調査では 20 代まで若者の割合が大きくなっており、「これまでの人生で」という文章、年齢を重ねているほど（30 代以上の割合が高いほど）自殺念慮を抱いた経験のある人が多くなるわけではないという結果が得られた。これに関しては、日本財団による調査結果である「現代の若い世代が自殺念慮を抱きやすい傾向にある」というものに加え、自殺念慮を抱いたときから長い時間が経つと「本気で自殺したかった」という思いが薄れていく、といった予想ができるのではないだろうか。

### 4.2 相関分析

3.3 では変数ごとの重回帰分析に進む前段階として、相関分析を行った。まずは本調査におけるもっとも重要である「相対的不満の強さが自殺念慮に影響する」という仮説についてである。表 15 のとおり、相関分析では相対的不満からの自殺念慮への影響が 1%水準で有意であることが明らかになった。表 16 では、「自殺念慮の強さ」と、相対的不満を測る 5 つの変数との相関分析を行い、唯一「社会への不平等感」からの影響が有意であるということができなかったが、ほかの変数にはすべて正の相関が有意であると認められた。

次にマスメディア・SNS から感じる劣等感と自殺念慮の分析では、相関分析によって「マスメディアや SNS で同世代の成功者を見て、劣等感を感じる」という変数による自殺念慮・相対的不満への影響が有意であると認められなかった。本調査では、マートンによる相対的不満での異なった社会的地位や社会的部類に属している他者というものに、SNS・マスメディアで見た著名人といったものを含むことができなかつたと言える。これにより、SNS やマスメディアが発達している現代、それらの媒体で見た実生活で接点のない他者という存

在を比較の対象として、相対的に自分がどの程度の満足、または不平・不満を感じるかという相対的不満に影響を及ぼすとは言うには、さらなる検討の余地が残る結果となった。

#### 4.3 重回帰分析

##### (1) 自殺念慮に影響を与える変数

ここでは相関分析の結果をふまえ、3.4で行った重回帰分析の結果について考察を進めていく。全体での分析、男女ごとの結果の違い、恋人・配偶者の有無との関係について行った。まずは回答者全体について、相対的不満の強さを測る各項目がどのように自殺念慮の強さに影響を与えているのかを考察する。表15から分かったのは「家族関係の悪さ」「友人関係の悪さ」「同世代における自己の不適正感」の3つの変数が、自殺念慮の強さに統計的に有意な正の影響を与えていることであった。決定係数である調整済み R<sup>2</sup> 乗値は 0.450 であり、相対的不満を測る変数が、従属変数である自殺念慮の強さの 45%を説明することができるというものである。これらの結果により、自分の家族関係が悪いと感じている人、友人関係が悪いと感じている人、同世代の中で自分が適正ではないと感じている人における自殺念慮が高いことが分かった。

次に男女別に行った結果についてである。男女における主な結果の違いは、従属変数である自殺念慮の強さへ、男性のみ「同世代における自己の不適正感」による有意な正の影響が見られ、女性のみ「友人関係の悪さ」による有意な影響が見られたことである。「家族関係の悪さ」については、どちらも従属変数に有意な正の影響が見られた。男性については同世代における自己の不適正感、つまり同世代の友人関係などにおいて、自分は周りに比べ相対的に劣った存在であると感じている人の自殺念慮が女性よりも高かったと言える。これは男性が自身の社会的立場について強い劣等感を感じた際、自殺してしまいたいと考えてしまう人が、女性よりも多いと読み取れる。日本財団(2016)の調査結果から、男性における自殺念慮の要因で「勤務問題(転勤、仕事の不振、職場の人間関係、長時間労働等)」「経済生活問題(倒産、事業不振、負債、失業等)」の割合が高いことが分かっており、本調査の結果から、こういった要因に社会的立場というものが影響しているのではないかと、ということが予測される。一方で女性では、友人関係の悪さが自殺念慮に影響することが分かった。女性について、同じく日本財団(2016)の結果では家族関係の要因が大きく、そして男性では上位でなかった「学校問題(いじめ、学業不振、教師との人間関係等)」の要因が大きいたことが分かっており、「友人関係の良し悪し」を関連させることができると考えられる。

##### (2) 恋人・配偶者の有無による影響

3.4(2)では、回答者に恋人または配偶者がいるかどうかという属性が、自殺念慮と相対的不満に影響を与えるかということ「恋人・配偶者ダミー」を用いて分析した。結果として「恋人がいる」という属性が、両方の従属変数に統計的に有意な正の影響を与えるということが分かった。しかしどちらの分析においても、決定係数である調整済み R<sup>2</sup> 乗値は本調査で行ってきた他の分析よりも非常に0に近く低い数字となっていた。このため、自殺念慮と相対的不満にかかる「恋人・配偶者の有無」への正の影響は、説明変数として不十分であると結論付けた。

### (3) 自殺容認度合いへの影響

3.4(3)では、自殺容認度へ影響を与える変数について、回帰分析を行った。結果から「家族関係の良さ」と「友人関係の良さ」が、どちらも自殺容認度に負の影響を与えていることが分かった。このことから家族や友人を信頼し、またそれらの関係において自分が重要であると考えている人ほど、他人の自殺について嫌悪するという傾向がわかる。この2つの変数は自殺念慮にも正の方向で影響しており、家族・友人関係の悪化が自殺容認度合いを低下させ、自殺念慮にも影響を及ぼしてしまうという関係が予測できる。

この自殺観と自殺念慮との関係は張賢徳(2016)によると、自殺に至るプロセスの根底には養育環境や社会文化的風土、宗教や信念が存在しており、それらが死や自殺に関する態度というものを作り上げていくものである。個人の死生観・自殺観には社会的要因の部分も大きく、例えば日本における仏教が自殺を明確に禁じていないことなども、自殺観に影響を与えている可能性があると言えることができる。

#### 4.4 自殺念慮に関する相談の有無

自殺念慮・自殺未遂における相談について考察を行う。本調査において自殺念慮を抱いた際、誰かに相談したのは73人中14人のみであった。また自殺未遂を経験した10人のうち、誰かに相談したのは3人と、どちらも相談しない人の方が多い結果となった。自殺念慮について相談しなかった理由について日本財団(2016)では8つの選択肢の中から1つを選ぶという方法をとっており、割合の高いものから「相談する必要がないので誰にも相談したくない」「相談したいができる相手がいない」「相談したいが遠慮して誰にも相談できない」という意見となっており、本調査において多かった「相談しても解決しないから」という意見も「相談する必要がないから」に含めることができるのではないかと考える。しかし、今回本調査では自由記述欄を設け、多様な回答を集めた。その回答の中には日本財団(2016)における「その他」の選択肢に当てはまるものも多く、自殺念慮の理由に加え、自殺念慮を相談しないという選択の背景には個人により様々な理由が存在しているということが改めて明らかとなった。

## 5 結論

本研究は、長い間自殺者の多さが問題となっているなか、マートンによる実生活の中で関わっている他者、また反対に実生活で関わりの無い他者と自分とを比べ、相対的に不満を感じてしまうという相対的不満という概念を調査に加え、調査票調査を行った。

その結果として、「家族・友達関係の良し悪し」「機会への不平等感」「同世代における自己の適正感/不適正感」「自分の器用さ」によって測った相対的不満が、自殺念慮に影響しているという仮説が実証された。また、男女別に行った重回帰分析により自殺念慮における性差についても実証され、特に相対的不満を測る「同世代における自己の適正感」という変数が、男性の場合にのみ自殺念慮に有意な影響を与えていることが明らかとなった。

また、今回の調査では回答者の属性として恋人・配偶者がいるということが自殺念慮に影響を与えるということはず、さらなる検討が必要であることが分かった。

自殺念慮・自殺未遂についての相談の有無では、自殺念慮では約 5 人に 1 人しか他人に相談をしなかったことが明かになった。その理由としては参考とした日本財団 (2016) の結果とも共通した部分として、「誰かに相談しても何も解決しない」「相談する必要がない」という回答が多く、自殺念慮を抱いた人の多くが「自殺念慮の原因を取り除かなければ意味がない」と考えているということが予測されるのではないだろうか。日本財団 (2019) の調査結果からは若年層の約 6 割が心理カウンセラーなどへの相談に抵抗感を持っていることが分かっており、この抵抗感に上記の考えが加わって、相談するという行為へのハードルが高くなっていると考えられる。今回の分析からは「家族・友人関係」といった点が自殺念慮に強く影響していることが分かった。日本財団 (2019) においても自殺リスクの低減には知った相手と積極的に接触を図ることが重要であるとされ、人間関係というものが自殺念慮につながる、もしくは遠ざける可能性を持った要因であることがわかる。このことから、まずは心理カウンセラーへの抵抗感を低減させ、一人でも多くの人との繋がりを持つことを支援していく流れが必要であると考えられる。

ここまで示した通り、自殺念慮を抱えてしまうまでには実に様々な要因が関係している。本調査において質問項目が 1 つしかなかった SNS・マスメディアに関する相対的不満も、さらなる研究により、実証される可能性があるのではないかと考える。また、調査には加えなかったが、身近な人の自殺というものも重大な要因として知られており、著者自身も経験した。この経験が自分の自殺観に影響を与えたのか、今はまだわからないが自殺という社会問題について研究を行うには十分すぎるほど大きな経験であったことは間違いない。自殺者数が大きな問題となっている日本において、いじめや虐待、体罰等、自殺念慮を強く促進してしまうような要因が少しずつでも無くなること、そして新型インフルエンザウイルス禍にあり、自殺者が急増している現在からも多くの自殺研究が進められることを望む。

最後に、本論文執筆にあたり、質問紙調査にご協力いただいた皆様、2 年間にわたりご指導いただいた立木茂雄教授、同じく 2 年間お力添えをいただいたアシスタントの川見さんと藤本さんに心からの感謝の気持ちとお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

[参考文献]

- 大野正和, 2003, 『過労死・過労自殺の心理と職場』, 青弓社.
- Émile Durkheim, 1897, *Le suicide : étude de sociologie*. (宮島喬訳, 2018, 『自殺論』中央公論新社).
- Riesman, David, 1961, *The lonely crowd : a study of the changing American character*. (加藤秀俊訳, 1964, 『孤独な群衆』みすず書房).
- Merton, Robert King, 1957, *Social theory and social structure : toward the codification of theory and research*. (森東吾ほか訳, 1961, 『社会理論と社会構造』みすず書房).
- 豊田 義博, 2017, 『彼らはなぜ自死してしまうのか』, リクルートワークス研究所研究紀要, 12, 68-81.
- 平野孝典, 2019, 『自殺の家族・職業的要因の地域差に関する基礎的分析』, 桃山学院大学社会学論集, 52(2), 99-114.
- 水津嘉克・佐藤恵, 2015, 「生きづらさを生き埋めにする社会」『社会学評論』66(4): 534-551.
- 平野孝典, 「社会的統合が自殺観に与える影響」, フォーラム現代社会学, 12: 43-55, 2013
- 張賢徳, 2016, 「自殺リスクの評価—ハイリスク者の発見と対応」『心身医学』56(8): 781-788
- 影山隆之, 2003, 「最近 20 年間の日本における青少年の死生観・自殺観に関する研究」『こころの健康』18(2): 70-76
- 相羽美幸・太刀川弘和・Lebowitz Adam J., 2019, 「対人関係欲求尺度と身についた自殺潜在能力尺度の日本語版の作成」『心理学研究』90(5): 473-483

[参考 URL]

- 日本財団, 2019, 「日本財団いのち支える自殺対策プロジェクト」, 日本財団ホームページ, (2020 年 1 月 13 日取得, [https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/suicide\\_measures](https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/suicide_measures))
- 厚生労働省, 2019, 「自殺対策」, 厚生労働省ホームページ, (2020 年 1 月 13 日取得, [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/shougaihashukushi/jisatsu/index.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaihashukushi/jisatsu/index.html))
- 警察庁, 2020, 「自殺者数」, 警察庁ホームページ, (2020 年 12 月 6 日取得, <https://www.npa.go.jp/publications/statistics/safetylife/jisatsu.html>)